

札幌大学総合研究 第十一号（二〇一九年三月）

〈釈注〉

『封氏聞見記』訳注（六）

高瀬 奈津子・江川 式部

本稿は、前稿に引き続き、唐の封演が撰した『封氏聞見記』巻三と巻四の訳注を行う。巻三は銓曹の後半部分であり、巻四は、紙幅の都合から、本稿では尊号の訳注を行う。

〔一〕『封氏聞見記』巻三・銓曹（二）

【原文】

開元初宋璟爲尚書、李义・盧從愿爲侍郎、大革前弊。據闕留人、紀綱復振。

時選人王翰、頗攻篇什【一作「賦」】而跡浮偽。乃竊定海内文士百有餘人、分作九等、高自標置。與張說・李邕並居第一、自餘皆被排斥。陵晨于吏部東街張之、甚于長名。觀者萬計、莫不切齒。從愿潛察獲、欲奏處刑憲、爲勢門保持、乃止。

姜晦自兵部侍郎拜吏部。從前銓中廊宇、布棘以防内外、猶不免交通。晦至、盡去之、大開門、示無所禁。初屬置者、晦輒知之、占論莫不首伏。初、朝廷以晦革詮司舊制、頗憂之。既而銓綜流品皆得其叙、而美聲洋溢。

十四年、元宗在東都、勅吏部置十銓。以禮部侍郎□□、工部尚書盧從愿、散騎常侍徐堅、御史中丞宇文融、朝集使蒲州刺史崔材【二

作「林」、魏州刺史崔征、鄭州刺史王岳、荊府長史韋虛心等同掌選、分爲十銓。吏部窄狹、乃權寄諸廳引注、選人喧繁、滿于省闔。明年、銓注復歸之吏部。承前所司注擬、皆約官資、升降之時、難於允愜。侍郎裴光庭始奏立條例、謂之循資格。自後皆率爲標準。舊良醞署丞、門下典儀、大樂署丞、皆流外之任。國初、東臯子王績始爲良醞丞。太宗朝、李義甫始爲典儀府。中宗時、余從叔希顏始爲大樂丞。三官從此並爲清流所處。

開元中、河東薛自據恃才名、于吏部參選、請授萬年縣錄事。吏曹不敢注、以諮執政、將許之矣。諸流外共見宰相訴云、「醞署丞等三官、皆流外之職、已被士人奪卻。惟有赤縣錄事是某等清要、今又被進士欲奪、則某等一色之人無措手足矣。」于是遂罷。

選曹每年皆先立版榜、懸之南院。選人所通文書、皆依版樣。一字有違、即被駁落、至有三十年不得官者。

楊國忠爲尚書、創爲押例、選深者先授官。有文狀闕失、許續通、不令駁放。淹滯之流、翕然歸美。其五品已上及清要官、吏部不注、送名中書門下者、各量資次臨時勅除。歷任有淺深、官資有高下。故授任者或稱檢校、或稱兼・試・知・攝・内供奉之類、名目非一。自頃諸【以下闕】

【訓読】

開元の初め宋璟尚書と爲り、李乂・盧從愿侍郎と爲り（一）、大いに前の弊を革む。留人を闕くに據り（二）、紀綱復た振う。

時に選人王翰、頗る篇什に攻みにして浮偽を跡す（三）。乃ち竊かに海内の文士百有餘人を定め、分けて九等と作し、高く自ら標置す。張説・李邕と並べて第一に居し（四）、自餘は皆な排斥せらる。陵晨に吏部の東街にて之を張り、長名より甚し。觀者万もて計うに、切齒せざるは莫し。從愿潜かに察べて獲え、刑憲に處すを奏さんと欲するも、勢門の爲に保持せられ、乃ち止む（五）。

姜晦兵部侍郎より吏部を拝す（六）。従前は銓中の廊宇、棘を布き以て内外を防ぎ、猶お交通を免れざるがごとし（七）。晦至り、尽く之を去り、大いに門を開き、禁ずる所無きを示す。初めて屬置せる者、晦輒ち之を知らば、論を占ねて首伏せざるは莫し（八）。初め、朝廷は晦の詮司の旧制を革むるを以て、頗る之を憂う。既にして銓綜流品は皆な其の叙を得、美声は洋溢す（九）。

〔開元〕十四年、元宗（玄宗）東都に在り、吏部に勅して十銓を置く（一〇）。禮部侍郎（尚書）□□〔蘇頌、刑部尚書韋抗〕、工部

尚書盧從愿、散騎常侍徐堅、御史中丞宇文融、朝集使蒲州刺史崔材（崔琳）、魏州刺史崔征（崔沔）、鄭州刺史（賈會、懷州刺史）王岳（王丘）、荊府（荊州）長史韋虛心等を以て同に選を掌らしめ、分けて十銓と為す（一一）。吏部は窄狹にして、乃ち權に諸序に寄りて引注し、選人の喧繁、省闕に満つ（一二）。

明年、銓注は復た之を吏部に帰す（一三）。承前の所司の注擬は、皆な官資を約し、升降の時、允愜に難し。侍郎裴光庭始めて條例を立つるを奏し、之を循資格と謂う（一四）。自後皆な率ね標準と為す。

旧は良醞署丞、門下典儀、大（太）樂署丞、皆な流外の任なり（一五）。国の初め、東臯子王續始めて良醞丞と為る（一六）。太宗朝、李義甫（李義府）始めて典儀府（典義）と為る（一七）。中宗の時、余の從叔希顔始めて大（太）樂丞と為る（一八）。三官此れ從り並びに清流の處る所と為る（一九）。

開元中、河東の薛據自ら才名を恃み（二〇）、吏部參選において、万年県録事を授からんことを請う（二一）。吏曹は敢て注さず、以て執政に諮るに、將に之を許さんとす（二二）。諸そ流外は共に宰相に見え訴へて云く、「醞署丞等の三官は、皆な流外の職なれど、已に士人に奪卻せらる（二三）。惟だ赤県の録事のみ是れ某等の清要に有り（二四）、今また又進士に奪わんと欲せらるれば、則ち某等一色の人は手足を措く無からん（二五）」と。是において遂に罷む。

選曹は毎年皆な先に版牒を立て、之を南院に懸く（二六）。選人の通す所の文書は、皆な版牒に依る（二七）。一字の違い有らば、即ち駁落せられ、三十年官を得ざる者有るに至る（二八）。

楊国忠尚書と為り、創めて押例を為り、選深き者は先に授官す（二九）。文狀に闕失有るも、続通を許し、駁放せしめず（三〇）。淹滞の流は、翕然として帰美す（三一）。其の五品已上及び清要官は、吏部注さず、名を中書門下に送り、各おの資次を量りて時に臨みて勅除す（三二）。歷任に浅深有り、官資に高下有り。故に授任者は或いは檢校を称し、或いは兼・試・知・撰・内供奉の類を称し（三三）、名目一に非ず。自頃諸【以下闕】

※「」は江川補。（ ）は訂。

【註釈】

(四)

(一) 開元の初め宋璟尚書と為り、李义、盧從愿侍郎と為り

宋璟(六六三―七七三)は、邢州南和(現在の河北省邢台市)人、調露(六七九)

進士、『旧唐書』卷九六及び『新唐書』卷二二四に伝がある。李义(六四七―七一四)は、趙州房子(現在の河北省臨城)人、字は尚真、

上元(六七四―六七六)進士で、『旧唐書』卷二〇一及び『新唐書』卷一一九に伝がある。盧從愿(六六八―七三七)は、相州臨漳(現

在の河北省臨漳県)人、字は于翼、明経に挙げられたのち制挙に応じた。『旧唐書』卷一〇〇及び『新唐書』卷一二九に伝がある。

ここには「開元の初め」とあるが、『資治通鑑』卷二二〇・唐隆元年(七一〇)七月條に「丁巳(八日)、以洛州長史宋璟檢校吏部尚

書、同中書門下三品」とあり、宋璟が吏部尚書に任ぜられ、李义・盧從愿らと共に官僚人事の綱紀是正に取り組んだのは、韋后と安樂

公主のクーデターが鎮圧され、睿宗が再び即位した際、すなわち「景雲の初め」の誤りであろう。『旧唐書』卷九六・宋璟伝には、

睿宗踐祚、遷吏部尚書・同中書門下三品……先是、外戚及諸公主干預朝政、請託滋甚。崔湜・鄭愔相次典選、為權門所制、九流失

敘、預用兩年員闕注擬、不足、更置比冬選人、大為士庶所歎。至是、璟與侍郎李义・盧從愿等大革前弊、取捨平允、銓綜有敘。

とある。また『旧唐書』同伝に「開元初、徵拜刑部尚書。四年(七一六)、遷吏部尚書、兼黃門監」とあることから、宋璟は玄宗朝に

おいても吏部尚書の任についており、「開元の初め」とする本文の齟齬は、この再任時と混同したためか。なお盧從愿は、景雲元年(七一〇)

から開元四年(七一六)まで吏部侍郎の任にあった。

(二) 留人を闕くに據り

「留人」は、本文前段の「宏道(弘道)中……」(前稿「封氏聞見記」訳注(五)・銓曹(二))、『札幌大学

総合研究』第十号、一〇一八年三月、参照)部分に「得留人(留を得たる人)」とあるのに照らせば、官人資格を持つ者でかつ任職に

堪え得ると裁定された者、の意であろう。「據闕(闕に據る)」とは、張耕評注『封氏聞見記』(学苑出版社、二〇〇一年)五二頁に「按

照實際空闕的職位注擬(實際に空欠となっている職位に基づいて人事を行う)」とあり、そう解するのが穏当か。

(三) 時に選人王翰、頗る篇什に攻みにして浮偽を跡す

王翰(生没年不詳)は并州晋陽(現在の山西省太原)人、進士及第。『旧唐

書』卷一九〇中・文苑及び『新唐書』卷二〇二・文芸に伝がある。「選人」は任官資格を有する者をいう。「篇什」は詩歌を集めた文集

の意で、『詩経』の雅・頌の十編を一什とすることに由来する。「浮偽」はうわべを飾り偽ること。「跡す」は行うの意。

(四) 張説・李邕と並べて第一に居し 張説(六六七―七三二)は河南洛陽人、字は道濟、則天武后の時に對策科に応じ、のち睿宗

朝で宰相となり、開元の初めには中書令に任ぜられた。文辭を善くし、朝廷の文案の多くを撰したが、開元一四年(七二六)に李林甫らの彈劾を受けて宰相を罷めた。『旧唐書』卷九七及び『新唐書』卷一二五に立伝、文集に『張燕公集』がある。李邕(六七八―七四七)は、揚州江都(現在の江蘇省揚州)人、字は泰和、『文選』の注で知られる李善の子。『旧唐書』卷一九〇・文苑、『新唐書』卷二〇二・文芸に伝がある。文辭のほか書法にも優れ、現存する碑刻に『李思訓碑』(開元八年(七二〇)、李邕撰・書)、『麓山寺碑』(開元一八年(七三〇)、李邕撰・書)等がある。文集はすでに散逸し、明人による輯本『李北海集』がある。

(五) 從愿潜かに察べて獲え、刑憲に處すを奏さんと欲するも、勢門の為に保持せられ、乃ち止む 「刑憲」は刑罰に関する法の意。「勢門」は勢力のある家柄の意で、ここでは具体名は挙げられておらず不詳。「保持」は維持するの意で、黙認されて処罰が行われなかったであろう。

(六) 姜晦兵部侍郎より吏部を拜す 姜晦は、開元初めに太常卿、宗正卿、秘書監等を歴任した姜皎(?―七二二?)の弟。『旧唐書』

卷五九及び『新唐書』卷九一に伝があり、開元初めに御史中丞、太常少卿等を歴任した。姜晦が兵部侍郎から吏部侍郎に遷ったのは、開元四年(七一六)、盧從愿の後任としてであつたとみられる。嚴耕望『唐僕尚丞郎表』(台湾中央研究院歷史語言研究所、一九五六年、五六九頁) 卷一〇・吏侍参照。

(七) 従前は銓中の廊宇、棘を布き以て内外を防ぎ、猶お交通を免れざるがごとし 「銓中」の銓は銓曹すなわち吏部さす。「廊宇」は建物。

「布棘」は、試験や人事の不正防止のために、人々が立ち入らないよう建物の周囲にいばらを並べ置くことをいう。

(八) 初めて属置せる者、晦輒ち之を知らば、論を占ねて首伏せざるは莫し この部分は、『新唐書』卷九一・姜晦伝にほぼ同じ内容

の記事がみえる。そこには、

除黃門侍郎、辭不拜、改兵部。滿歲、為吏部侍郎、主選。曹史嘗請託為姦、前領選者周棘扃藩、檢窻内外、猶不禁。至晦、悉除之、示無防限、然處事精明、私相属諉、罪輒得、皆以為神。始、晦革旧示簡、廷議恐必敗、既而贓賂路塞、而流品有敘、衆乃伏。

とある。底本の「初めて属置せる者」は、『新唐書』では「私相属諉(私に相い属諉す)」と記されており、ここを頼りに意味を推るならば、

本文の「属置」は人事に際して不正を働こうとした者の意か。「占論」の占は、たずねる、問いただすの意、論は考え。「首伏」は自ら罪を認めて服すること。

(九) 既にして銓綜流品は皆な其の叙を得、美声は洋溢す 「銓綜」は人材を選抜すること、「流品」は人物の高下をさす。「洋溢」は満ち溢れて広くひろがること。

(一〇) 十四年、元宗(玄宗) 東都に在り、吏部に勅して十銓を置く 玄宗は前年(開元二十三年(七二五)) 十一月に泰山で封禪を行い、その年の一二月より東都洛陽に滞在していた。『唐会要』巻七四・選部上・論選事には、

十三年十二月、封嶽迴、以選限漸迫、宇文融上策、請吏部置十銓。〔原註…礼部尚書蘇頌・刑部尚書韋抗・工部尚書盧從愿・右散騎常侍徐堅・御史中丞宇文融・朝集使蒲州刺史崔林・魏州刺史崔沔・荊州長史韋虛心・鄭州刺史賈曾・懷州刺史王丘等十人〕。

とあり、底本で「十四年」とあるところは、正しくは十三年の年末とみられる。このときの十銓の設置は、宇文融の上策によるものであった。開元一三年の十一月に封禪が行われたのち、玄宗に同行した高官らも洛陽に滞在しており、選人の期限が迫っていることを理由に、十人の担当者(十銓)が選ばれて人事を行ったのであろう。

(一一) 礼部侍郎(尚書) □□〔蘇頌、刑部尚書韋抗〕、工部尚書盧從愿、……同に選を掌らしめ、分けて十銓と為す 本文には欠文の礼部侍郎をはじめ八名が記されるのみであるが、前掲註(一〇)に引いた『唐会要』巻七四・選部上の原註、また『新唐書』巻一三四・宇文融伝にも次のようにある。

会帝封太山還、融以選限薄冬、請分吏部為十銓。有詔融與礼部尚書蘇頌・刑部尚書韋抗・工部尚書盧從愿・右散騎常侍徐堅・蒲州刺史崔琳・魏州刺史崔沔・荊州長史韋虛心・鄭州刺史賈曾・懷州刺史王丘分總、而〔張説〕不得參事、一決於上。

十銓については、底本、『唐会要』注、『新唐書』相互間で若干の相違がある。他史料と異なる底本の記述を確認していくと、まず「礼部侍郎□□(欠)」とあるところは、「礼部尚書蘇頌・刑部尚書韋抗」が入るとみてよいだろう。底本には「礼部侍郎」とあるが、開元一三年末に礼部侍郎の任にあったのは賀知章(嚴耕望『唐僕尚丞郎表』巻一六・輯考下・礼侍参照)で、彼は十銓には関与していない。蘇頌(六七〇―七二七)は京兆武功(現在の陝西省咸陽市武功県)の人で、字は廷頌、開元一二年(七二四)から亡くなる

一五年（七二七）七月の間、礼部侍郎の任にあった。『旧唐書』卷八八及び『新唐書』卷一二五に伝がある。礼部尚書は、尚書礼部の長官で、正三品、定員は一名。

刑部尚書韋抗については、他書との相違はない。韋抗（六六七―七二六）は京兆長安人、字も抗、清貧な人物として評価が高かった。彼が刑部尚書の任にあったのは開元一一年（七二三）から亡くなる開元一四（七二六）八月までの間である。『旧唐書』卷九二及び『新唐書』卷一二二に伝があるほか、『全唐文』卷二五八に蘇頌撰の「刑部尚書韋抗神道碑」がある。刑部尚書は尚書刑部の長官で正三品、定員は一名。

工部尚書盧從愿については前掲註（一）を参照。盧從愿は景雲元年（七一〇）に吏部侍郎の任に就き、その後開元四年（七二六）五月に豫州刺史に貶せられていちど長安を離れる。やがて工部侍郎の任を得て戻り、尚書左丞に遷って『開元後格』の刪定に参与、開元一一年（七二三）から工部尚書に任ぜられていた。工部尚書は尚書工部の長官で正三品、定員は一名。

散騎常侍徐堅（六五九―七二九）は、字は元固、湖州（現在の浙江省湖州市）人で、太宗の徐賢妃、高宗の徐婕妤の侄。武后の聖曆二年（六九九）に、徐彦伯・劉知機・張説らと大型の類書『三教珠英』（已佚）を編纂し、またのちに『初学記』三十巻を著した。開元一三年（七二五）に左散騎常侍に任ぜられ、また当時玄宗が麗正書院を集賢院と改めた際に学士に起用されて、知院事の張説とともに東封儀注の撰に当たった。『旧唐書』一〇二及び『新唐書』卷一九九・儒林に伝がある。散騎常侍は唐代では左右があり、左散騎常侍は門下省に属し、従三品、定員は二名。右散騎常侍は中書省に属し、従三品、定員は二名であった。それぞれ両省の顧問官である。

御史中丞宇文融については、他書との異同はない。宇文融（？―七三〇頃）は京兆万年人、開元の初めに監察御史となり、開元九年（七二二）には殿中侍御史勾当括戸勸農租庸地税等使として、逃戸に対する括戸政策を行ったことで知られる。『旧唐書』卷一〇五及び『新唐書』卷一三四に伝がある。開元一二年（七二四）八月一二日に御史中丞に遷り、開元一三年一二月の十銓人事を主導したが、これは当時彼と不仲であった中書令・張説を人事から遠ざける目的があった。御史中丞は御史台の次官で正五品上、定員は二名。

「朝集使蒲州刺史崔材」は、「崔琳」が正しい。崔琳（生没年不詳）は貝州武城（現在の山東省武城県）人、『旧唐書』卷七七・崔義玄伝及び『新唐書』卷一〇九・崔義玄伝に附伝がある。開元天宝期に弟の珪・瑤とともに高官となり、開元一一年（七二三）末に一時

吏部侍郎に任ぜられていた。「朝集使」は、毎年地方から朝廷へ赴き政務や歳計の報告を行う使職で、朝会に参加して皇帝に上奏を行うことも許されていた。

『魏州刺史崔征』は「崔沔」が正しい。崔沔（六七三―七三九）は、京兆長安人で、字は善沖。開元二二（七二四）に中書侍郎を兼務したまま魏州刺史に任ぜられ、開元一三年（七二五）の東封ののち朝散大夫を加えられた。郁賢皓『唐刺史考全編』（安徽大学出版社、二〇〇〇年）巻九八・魏州。一三七四―一三七五頁参照。『旧唐書』一八八・孝友及び『新唐書』巻一二九に伝があるほか、『全唐文』巻三三八に顔真卿撰「通議大夫守太子賓客東都副留守雲騎尉贈尚書左僕射博陵崔孝公宅陋室銘記」が収載されており、また一九六〇年代に洛陽から墓誌（大暦一三年（七七八）「有唐通議大夫守太子賓客贈尚書左僕射崔孝公墓誌」）。現在、開封市博物館蔵）が出土している。代宗・徳宗期の宰相崔祐甫（七二一―七八〇）の父。

「荊府長史韋虛心」の「荊府」は荊州のこと。荊州は龍朔二年（六六二）より大都督府となっており、長官の大都督は皇室関係者が肩書を帯びることが多いため、その次官である長史（正三品下）が実質的な行政長官であった。韋虛心（？―七四一）は京兆杜陵人、『旧唐書』巻一〇一及び『新唐書』巻一一八に伝があるほか、『全唐文』巻三二三に孫逖撰「東都留守韋虛心神道碑」が収載されている。韋虛心が荊州（荊府）長史の任にあった正確な時期は、列伝や神道碑からも不明で、底本の当該記事により、開元一三―一四年の間であると考えられている。

「鄭州刺史王岳」は「懷州刺史王丘」が正しい。他史料では「鄭州刺史賈曾」の名が見えているので、底本の当該部分では「鄭州刺史賈曾」。「懷州刺史王丘」の前後二者を誤って連結してしまったものか。王丘（？―七四三）は相州安陽（現在の河南省安陽市）人、字は仲山、『旧唐書』巻一〇〇及び『新唐書』巻一二九に伝がある。開元八年（七二〇）に一時期吏部侍郎に任ぜられており、開元一一年（七二三）には黃門侍郎となり、玄宗の泰山封禪に際して開元一二年（七二四）に懷州刺史を拜していた。

その他、底本に名はみえないが、（鄭州刺史）賈曾を加えておく。賈曾（？―七二七）は河南省洛陽人。『旧唐書』巻一九〇・文苑及び『新唐書』巻一一九に伝がある。景雲二年（七一一）に一時期吏部員外郎を経ており、開元一〇年（七二二）―一一年（七二三）に徐州刺史を務めたのち、開元一三年（七二五）に鄭州刺史の任にあった。

以上みてきたところでは、十銓の担当者は概ね五品以上官ではあるが、吏部経験者ばかりというわけではなく、宇文融の人選に明確な基準があったようにはみえない。張説の影響力を排除しようとしたという面はあったにせよ、本来の担当官である吏部尚書（開元一三年末当時は裴濯）や吏部侍郎（開元一三年末当時は李元紘または蒋欽緒か）を排除したことは、間もなく呉兢により批判を受けることになった。後段参照。

（一二）吏部は窄狭にして、乃ち権に諸庁に寄りて引注し、選人の喧繁、省闥に満つ 「窄狭」はすばまってしまいこと。「權寄諸廳」は他の庁舎をかりること。「引注」は官籍を注録（登録ないし記録）すること。応試して選人となったのち尚書省に登録、のち業績や才能によって官職に擬定され、これを注擬といった。「喧繁」は、さわがしくうるさいこと。「省闥」は宮中。十銓による人事は、このとき行在の洛陽城内で行われた。このため吏部以外の諸庁舎も借りて行われたがそれでも注擬に集まる人々を収容しきれず、喧騒が宮中にまで及んだことを述べたものであろう。さらに、後段註（二三）に引く呉兢の上表（『唐会要』卷七四・選部上）には「及試判將畢、遽召入禁中決定（試判將に畢らんとするに及び、遽りて禁中に召入せしめて決定す）」ともあり、このときの注擬は宮中で玄宗が直々に行ったものもあったようである。

（二三）明年、銓注は復た之を吏部に帰す 「明年」は開元一四年（七二六）。十銓については、間もなく呉兢（六七〇—七四九）の批判を受けることになった。『唐会要』卷七四・選部上には、

太子左庶子吳兢上表諫曰。「臣聞易称『君子思不出其位』、言各止其所、不侵官也。此実百王準的。伏見勅旨、令刑部尚書韋抗等十人、分掌吏部銓選。及試判將畢、遽召入禁中決定。雖有吏部尚書及侍郎、皆不得參議其事。議者皆以陛下曲受讒言、不信於有司也。……凡是選人書判。並請委之有司。仍停此十銓分選。依旧以三銓為定。」

とあり、十銓には吏部尚書・侍郎ともに関わっておらず、讒言を真に受けて有司を信用せずに人事を断行した、と玄宗に上表して諫めたのである。巡幸中に宇文融の建議により洛陽で行われた異例の注擬ではあったものの、その方法については問題が多く、翌年からは従来の吏部銓に戻されることになった。

（二四）承前の所司の注擬は、皆な官資を約し、升降の時、允愜に難し。……之を循資格と謂う 「承前」は前からの続き、以前。「注

擬」はいわゆる人事、前掲註(一二)を参照。「官資」は官吏となる資格。「允懷」は事がよく時情に合うこと。「侍郎裴光庭」とあるが、「(吏部)尚書裴光庭」の誤り。裴光庭(六七五―七三三)は絳州聞喜(現在の山西省聞喜県)人、字は連城、『旧唐書』卷八四及び『新唐書』卷一〇八に伝があるほか、『全唐文』卷二九一に張九齡撰「大唐金紫光禄大夫行侍中兼吏部尚書弘文館学士贈太師正平忠獻公裴公碑銘并序」がある。裴光庭が吏部尚書の任にあつて、循資格について奏上したのは開元一八年(七三〇)四月である。底本では裴光庭の循資格についてあまり詳しく述べてはいないが、『冊府元龜』卷六三〇・銓選部二・條制二に、

(開元)十八年四月、侍中裴光庭以選人既広、常限或有出身二十餘年而不獲祿者、復作循資格定為限域。凡官罷滿、以若干選而集、各有差等、卑官多選、高官少選、賢愚一貫、必合乎格者、乃得銓授。自下升上、限年躡級、不得逾越。久淹不収者、皆荷之謂之聖書。雖小有常規、而求材之方失矣。〔原註…此起於後魏崔亮。停年之制也〕其有異才高行、聽擢不次。然有其制而無其事、有司但守文奉式、循資圧例而已。

とあり、当時、出身を得てのち二十年以上も職を得られないケースがあり、このため才能ではなく年功によつて昇進ができるよう、それまでの業績主義を改めたものであつたとみられる。昇級の滞つていた者たちにとっては、この方法は「聖書」と呼ぶほど有難いものであつた。しかし年功のみを人事の基準とすることは、『冊府元龜』が「小や常規有ると雖も、求材の方は失はる」「其の制有りて其事無し」と評するように、人事を行う側には準拠としやすく、受ける側にもわかりやすいものではあつたにせよ、一方で行政の現場における適材適所の必要性を考慮しないものとならざるを得なかつた。

(二五) 旧は良醞署丞、門下典儀、大(太) 楽署丞、皆な流外の任なり 良醞署丞は光禄寺良醞署の次官、正九品下、定員は二名。

良醞署は祭祀に用いる酒の醸造と神前への配置を司る。門下典儀は門下省の属官で従九品下、定員は二名。職掌については『唐六典』卷八・門下省に、

典儀掌殿上賛唱之節、及設殿庭版位之次。〔原註…若元正・冬至大朝会、王公升殿、既坐、酒至而起、皆伝賛唱而為之節也。〕一とあり、祭祀のときの儀式的賛唱や、殿庭の版位(儀式参列者の立ち位置を示す板印)の設置を行う。「大(太) 楽署丞」は太常寺太楽署の次官で、従八品下、定員は一名。太楽署は国の祭祀や宴饗時の奏楽を担当する。右の三官の品階は、『唐六典』ではいずれも流

内となっているが、底本後段にあるように、唐初は流外官であったのだろう。

（二六）国の初め、東臯子王績始めて良醞丞と為る 王績（五八六？―六四四）は、隋末唐初の官僚で詩人、絳州龍門（現在の山西省河津市）人、字は無功、東臯子と号した。隋末の儒学者・王通（五八四―六一八。号は文中子）の弟。秘書省正字として隋朝に仕え、唐初には門下省にて待詔の任にあったが、のち官を辞して郷里に戻った。『旧唐書』卷一九二・隱逸及び『新唐書』卷一九六・隱逸に伝がある。文集は既に散逸し、後代の輯本に『東臯子集』『王無功集』がある。底本には「王績始めて良醞丞と為る」とあるが、王績が就いたのは太楽丞のようである。王績の酒好きは有名で、『新唐書』卷一九六の伝には次のようにある。

高祖武徳初、以前官待詔門下省。故事、官給酒日三升、或問、「待詔何樂邪」。答曰「良醞可恋耳」。侍中陳叔達聞之、日給一斗、時称「斗酒学士」。貞觀初、以疾罷。復調有司、時太楽署史焦革家善釀、績求為丞、吏部以非流不許、績固請曰「有深意」、竟除之。革死、妻送酒不絶、歳餘、又死。績曰「天不使我酣美酒邪」棄官去。自是太楽丞為清職。

ここをみると王績は、太楽署史の焦革の家が、醸造を上手に行うという話を聞き、焦革との交誼を図って、彼と同じ太楽署に官を望んだとある。すなわち、王績が就いたのは底本にある「良醞丞」ではなく、「大楽丞」であったとみられる。のちに「酒好きの王績」というイメージが「良醞丞」との誤りを生じさせたか。

（二七）太宗朝、李義甫（李義府）始めて典儀府と為る 底本の「李義甫」は「李義府」の誤り。また「典儀府」は「典儀」の誤りで、門下典儀のこと。門下典儀については、『唐六典』卷八・門下省條の原註に、

皇朝置典儀二人、隸門下省。初、用人皆輕。至貞觀初、李義府為之、是後常用士人。

と述べられている。

李義府（六一四―六六六）は、唐太宗（高宗期）の官僚。瀛州饒陽（現在の河北省衡水市饒陽県）の人で、祖父のときに梓州永泰（現在の四川省綿陽市塩亭県）に遷った。貞觀八年（六三四）、劍南道巡察大使であった李大亮の推薦を受けて対策擢第し、門下省の典儀となった。やがて高宗が即位すると（六四九）中書舍人に遷り、永徽二年（六五一）には弘文館学士兼修国史に任ぜられた。王氏立后を支持して、顯慶二年（六五七）には中書令となった。『旧唐書』卷八二及び『新唐書』卷二三上・姦臣に伝がある。榮達的一方で、『旧唐

書」李義府伝には、

義府貌状温恭、與人語必嬉怡微笑、而褊忌陰賊。既處權要、欲人附己、微忤意者、輒加傾陷。故時人言義府笑中有刀、又以其柔而害物、亦謂之「李貓」。……義府貪冒無厭、與母・妻及諸子・女婿売官鬻獄、其門如市。多引腹心、廣樹朋党、傾動朝野。

とあり、温和な表情とは裏腹に陰險な性格であったこと、また任官や訴訟に借りて賄賂を取り、さらに朋党を組織して権勢をふるったこと等が述べられている。

(一八) 中宗の時、余の従叔希顔始めて大(太)楽丞と為る 「中宗」は唐朝第四代皇帝李顕(六五六―七一〇)、のちに李哲と改名。

高宗と則天武后の子で、在位は六八三年二月―二月、及び七〇五年一月―七一〇年六月。「従叔」は父方の祖父・曾祖父を同じくし輩行が上の男性親族をさす。「希顔」すなわち封希顔については新旧『唐書』に伝はなく、唐・林宝撰『元和姓纂』卷一に、

〔封〕德潤、隋青城令、生行賓・行高・梁客。行賓生広成(広城)、雍州司法。広成(広城)生希彦(希顔)、中書舍人・吏部侍郎とある。德潤は唐初の宰相・封德彝の兄である。また『新唐書』卷一二九・崔沔伝には、

睿宗召(崔沔)授中書舍人、以母病東都不忍去、固辞求侍、更表陸渾尉郭隣・太楽丞封希顔・處士李喜以代己處とあり、睿宗朝で太楽丞に任ぜられていたことがわかる。「始めて大(太)楽丞と為る」とする本條の左証となろう。

(一九) 三官此れ従り並びに清流の處る所と為る 「三官」は右にみた良醞丞・門下典儀・太楽丞をさす。「清流」は高貴な人、名士をさす詞だが、ここでは清品、すなわち出世コースとなる良い官位の意と解するのが適當だろう。

(二〇) 開元中、河東の薛據自ら才名を恃み 底本に「薛自據恃才名」とあるところは、「薛據自恃才名(薛據自ら才名を恃み)」の誤り。薛據(生没年不詳)については『旧唐書』卷一四六・薛播伝に、薛播の兄として名が挙げられるのみで詳細は不詳。清・徐松撰、孟二冬補正『登科記考補正』上(北京燕山出版社、二〇〇三年)によれば、開元九年(七二二)進士であった。『同』二五八頁の孟二冬氏の考証を参照。また韓愈「国子助教河東薛君(公達)墓誌名」(『韓昌黎文集』卷六)には、「父曰播、尚書礼部侍郎、侍郎命君後兄據、據為尚書水部郎中、贈給侍中」とある。「才名」は才能があるという評判、またその才知。

(二一) 吏部參選において、万年県録事を授からんことを請う 「吏部參選」はいわゆる吏部銓をさす。唐では、五品以上官について

は宰相（尚書左右僕射・門下侍中・中書令のうち「知政事」「参預朝政」「参知政事」等の頭銜を持つ者で、高宗朝以後は多く「同中書門下三品」、肅宗朝以後は「同中書門下平章事」を銜称した）が詮議したのち皇帝の批准を受けて任命が行われたが、六品以下官については吏部にて注擬が行われた。吏部尚書が六七品の任官を掌り、これを尚書銓という。また吏部侍郎二名が八・九品の任官を掌り、一方を中銓、もう一方を東銓といった。この尚書銓・中銓・東銓をあわせて「（吏部）三銓」という。『通典』卷二三・職官五・吏部尚書條参照。

「万年県」は京兆長安に置かれた二つの行政県（長安県と万年県）の一方で赤県。赤県とは、三都（長安・洛陽・太原）城内に置かれた県すなわち京県のことで、洛陽は洛陽県と河南県、太原は太原県と晋陽県が赤県とされた。唐代の県の等級には、赤県・畿県・望県・緊県・上県・中県・中下県・下県の八等があり、のち更に次赤県・次畿県の二級が加えられた。「赤県」録事」は、品階は従九品下で定員は二名。

（二二）吏曹は敢て注さず、以て執政に諮るに、將に之を許さんとす 「吏曹」は吏部のこと。「執政」はこの場合は宰相をさす。赤県の録事の品階は註（二二）でみたとおり従九品下であり、本来は吏部にて注擬が行われるが、このときは宰相の判断に委ねられたのであろう。

（二三）諸そ流外は共に宰相に見え訴へて云く、「醜署丞等の三官は、皆な流外の職なれど、已に士人に奪卻せらる 「流外」は九品以外の官をいう。唐の官制では、まず一品から九品までの九品階があつてそれぞれ正・従に分かれ、更に五品から九品まではそれぞれ上・下に分かれて、全三十階があつた。そしてこの三十階以外に勲品九品が置かれており、これを流外といった。『通典』卷一九・職官一・要略官品條に次のようにある。

大唐自流内以上、並因隋制。……又置勲品九品、自諸衛録事及五省令史始焉、謂之流外。流外自此始。〔原註…勲品自齊梁即有之〕（二四）惟だ赤県の録事のみ是れ某等の清要に有り 「清要」は地位が顕貴な要職をいう。南宋・趙升の『朝野類要』卷二・称謂・清要條に「職慢位顯謂之清、職緊位顯謂之要。兼此二者、謂之清要。」とある。赤県の録事はもともと進士の起家官ではなく、流外官らにとつては昇進の最終到達点の一つであり、主要な出世コースとなっていたのだらう。

(二五) 今また進士に奪わんと欲せらるれば、則ち某等一色の人は手足を措く無からん 「某等」はわれら。「一色之人」の一色については用例が他史料になく、管見の限り底本が唯一の例である。案ずるに、唐朝の官服(常服)の制度では、朝代により若干の変更があるものの、三品以上が紫、五品以上が緋、六・七品が緑、八・九品が青(碧)、そして流外・庶人は黄と、それぞれ身分によって色が定められていた。すなわち、流内官の場合は紫・緋・緑・青と四色の差等があったが、流外官は九級すべて、官服は黄一色であったことを考えると、ここである「一色之人」とは、黄色の官服を着た(流外の)人々という意で理解できよう。

(二六) 選曹は毎年皆な先に版勝を立て、之を南院に懸く 「選曹」は吏部のこと。「版勝」は本項前段に出てきた「勝」すなわち長名勝をいう。拙稿『封氏聞見記』訳注(五)・銓曹(一)の註釈(八)を参照。「南院」は「吏部選院」また「南曹」ともいう。『唐会要』卷七四・選部上・吏曹條例には次のようにある。

〔開元〕二十八年八月、以考功貢院地置吏部南院、以置選人文書、或謂之選院。其選院本銓之内、至是移出之。東都至二十一年七月、以太常園置之。

東都洛陽に開元二十一年(七三三)に設置されたのに続き、開元二十八年(七四〇)には京兆長安の吏部貢院の地にも置かれて、人材の選抜が行われたことが述べられている。長安の吏部南院の設置時期については、唐・李肇『唐国史補』卷下には「自開元二十二年(七三四)、吏部置南院、初縣(懸)長名、以定留放。」ともあり、また開元二十五年(七三七)成書の『唐六典』卷二・尚書吏部・吏部員外郎條にも南曹の記載があることから、開元二十八年とする『唐会要』の記述は誤りか。

既に本項前段でもみてきたように、任官資格を持つ者は、尚書吏部に赴き、吏部の注擬を待たなければならない。南院(選院・南曹)の業務は、『旧唐書』卷四三・職官・吏部員外郎條に、

員外郎一人掌判南曹〔原註…曹在選曹之南、故謂之南曹〕。每歲選人、有解狀・簿書・資歷・考課、必由之以覈其実、乃上三銓。其三銓進甲則署焉。

とあるように、求官者が持参してくる解状・簿書・資歷・考課の内容を査閲して三銓に回す、いわば官職応募者の書類受付を行うことであった。

王寿南氏によれば、当時官職を求める人々には二つの立場があり、一つは任官資格を持ちながらまだ官職を得ていない者、もう一つは任期満了などで官を辞めた者であった。吏部では毎年五月に、その年の選人資格を規定した「格」を州県に頒布し、応募希望者でこの選格に合致する者は、まず州県の衙署より選解を受け、その証明となる解状と、本人の簿書・資歴・考課等の履歷書を携えて、長安・洛陽で行われる十月の吏部候選に集まったのである。王寿南『隋唐史』（三民書局、一九八六年）四二七頁参照。

（二七）選人の通す所の文書は、皆な版様に依る

「選人」はここでは官職を求めて応募してきた人々をさす。「所通文書」とは、前掲註（二六）でみたように、応募者が持参した解状・簿書・資歴・考課の書類のこと。「通」は受け付けた書類を送送すること。「版様」については判然としないが、『新唐書』卷二〇六・外戚・楊国忠伝に、

国忠既以宰相領選、始建罷長名、於銓日即定留放。故事、歲揭版南院為選式、選者自通、一辞不如式、輒不得調、故有十年不官者。とあるところを見ると、応募の際に提出する書類については、決められた書き方、すなわち『新唐書』でいう「選式」があったことがわかる。底本にみえる「版様」はこの「選式」のことと理解してよいだろう。また霍存福『唐式輯佚』（楊一凡主編、中国法制史考証続編 第八冊、社会科学文献出版社、二〇〇九年）には、唐吏部式凡そ八條が復原されているが、その中に「毎年冬薦官、吏部准式檢勘」〔『唐会要』卷八二・冬薦〕の一條が、吏部式としてあげられている。十月の冬集（冬薦）に集まった人々から提出された書類は、この南院の官吏らによって、「（吏部）式」〔『新唐書』でいう「選式」〕の規定と照合しつつ査閲が行われたとみてよいだろう。

（二八）一字の違い有らば、即ち駁落せられ、三十年官を得ざる者有るに至る

「駁落」は落第または免職させること。また底本では「三十年」とあるところは、前掲註（二七）に引いた『新唐書』楊国忠伝では「十年」としている。いずれが是かは不明だが、書式のわずかな不備により、長期間にわたって授官されない者のいたことは事実であろう。

（二九）楊国忠尚書と為り、創めて押例を為り、選深き者は先に授官す

楊国忠（？―七五六）は唐玄宗期の官僚で、蒲州永樂（現在の山西省永濟市）の人、本名は釗。『旧唐書』卷一〇六及び『新唐書』卷二〇六・外戚に伝がある。玄宗の寵妃となった楊貴妃の従兄弟で、はじめ劍南節度使・章仇兼瓊の使いとして長安に赴き、玄宗に登用されて監察御史となった。天宝七載（七四八）に給事中兼御史中丞専判度支事となり、天宝一一載（七五二）には、亡くなった李林甫に代わって右相（中書令）兼文部尚書（天宝一一載三月に

吏部を文部と改称)に任ぜられて、官僚人事を統括した。「押例」は、このとき楊国忠が行った人事の方法で、任官年期の長い者から優先的に授官させる例をいう。底本の後段、『封氏聞見記』巻五・頌徳條には、

林甫薨後、楊国忠爲左(右?)相兼総銓衡。従前注擬、皆約循資格、至国忠創爲押例、選深者尽留、乃無才与不才也。

とあり、かつて裴光庭が行った「循資格」、すなわち年功序列に基づく方法であったとみられる。「選深」は任官年期の長いこと。

(三〇) 文状に關失有るも、続通を許し、駁放せしめず 「文状」は先にみた、解状等の吏部南院に提出する申請書類。「続通」は、書類を滞りなく通送する意か。「駁放」は是非を調べ正して斥けること。

(三一) 淹滞の流は、翕然として歸美す 「淹滞」は才能を持ちながら下位にとどまっていること、「流」はともがら。「翕然」は集まるさま。「歸美」は褒め称えること。『新唐書』巻二〇六・外戚・楊国忠伝には、

国忠創押例、無賢不肖、用選深者先補官、牒文謬缺得再通、衆議翕然美之。

とあり、底本とほぼ同じ内容を載せる。

(三二) 其の五品已上及び清要官は、吏部注さず、名を中書門下に送り、各おの資次を量りて時に臨みて勅除す 「中書門下」は、開元十一年(七二三)にそれまで中書・門下・尚書の三省の長官の会議室であった政治堂を、当時の中書令・張説が「中書門下」と改称し宰相の執務室として独立させたもの。「資次」は位階のこと。「勅除」は皇帝が直接詔を下して任命すること。

(三三) 故に授任者は或いは検校を称し、或いは兼・試・知・撰・内供奉の類を称し 「検校」は、唐代前半では正式な拝官を受けないまま当該官の職権を執行する場合をいい、唐後半では当該官の職権は持たない虚銜となった。「兼」は別の一官職を兼任することをいうが、唐代前半では実兼、すなわち兼任官の職務を執行し、唐後半では虚兼となり名目的なものとなった。「試」は正式な任命以外の任用方法の一つで、武后以後に多く行われた。『唐会要』巻六七・試及邪濫官を参照。「知」は他官の職務を兼任することをいい、正式な拝官を受けず、詔勅によって委任される。「撰」は代理の意で、吏部の補授は終ずに、当該長官の決定により該官の職務を代行させることをいう。「内供奉」は一種の加銜で、御史のうち資歴の浅い者をいった。またのちに門下省の右補闕や左拾遺、中書省の右補闕や右拾遺のうち、同じく資歴の浅い者に「内供奉」を加銜した。定員はないが、正員の半数を超えないことが原則とされた。

【現代語訳】

開元の初めに宋璟が吏部尚書となり、また李义・盧從愿が吏部侍郎となって、大いに以前の弊害を改めた。留人がなくなり、大いに綱紀が肅正された。

ある時、選人の王翰は、詩歌の編纂が得意であることを鼻にかけて、軽拳なふるまいをした。すなわち手前勝手に、海内の文士百余人を選んで九等に分け、これを高く掲示したのである。張説・李邕（とともに自らを）第一等に置き、それ以外はすべて排斥された。早朝に吏部の東街にこれを張り出したため、（混雑は）長名よりひどいありさまとなった。観る者は雲霞のごとくであり、齒ぎりしない者はいなかった。從愿はひそかに調べて獲え、法による処罰を上奏しようとしたが、権力者らによって抑え込まれてしまい、ついに沙汰やみとなった。

姜晦は兵部侍郎から（異動して）吏部侍郎を拝命した。以前は銓曹の建物（の周囲）には、棘を置いて内外（の往来）を防いでおり、通行できないようになっていた。晦が就任してからは、これらをすべて取り去り、大いに門を開いて、（往来を）禁止しないむねを示した。人事に託して不正を働こうとする者がいれば、晦は速やかに之を察知して問いただし、罪を認めない者はいなかった。当初朝廷は、晦が吏部の旧制を革めたことについて、大いに心配していた。しかしすでに人事の秩序が回復し、彼の名声は広く世間に知れ渡った。

開元十四年（実際には十三年一二月）、玄宗が東都に居られた折、吏部に勅して十銓を置いた。礼部侍郎（尚書）□□〔蘇頌、刑部尚書韋抗〕、工部尚書盧從愿、散騎常侍徐堅、御史中丞宇文融、朝集使蒲州刺史崔材（崔琳）、魏州刺史崔征（崔沔）、鄭州〔刺史賈曾、懷州〕刺史王岳（王丘）、荊府（荊州）長史韋虛心らに人事を行わせ、分けて十銓とした。吏部は狭く、よって他の庁舎を借りて人事を行ったため、選人らの喧騒は、宮中にまで響き渡った。

明年、人事についてはこれを吏部に戻した。それまでの人事では、皆な資格を主としており、昇進降格の時期は、その時々的情況と合わなかった。吏部侍郎となった裴光庭は、はじめて條例をつくることを奏上し、これを循資格といった。これより以後（の人事で）は、概ねこれが基準とされた。

そもそも良醞署丞・門下典儀・大（太）樂署丞は、いずれも流外の官であった。国の初め、東臯子王績が良醞丞となった。太宗朝で

は李義甫（李義府）が典儀府（典儀）となった。中宗の時にはわたくしの従叔の希顔が大（太）楽丞となった。三官はこれ以後、すべて清流の者が就任する官となったのである。

開元中、河東の薛據は自分の才能を誇り、吏部の人事において、万年県（注）の録事を授けてくれるよう請願した。吏部は敢えて結論を出さず、これを宰相らに諮ったところ、許されることになった。流外の人々が、ともに宰相に拝謁して訴えていうには、「醞署丞等の三官は、皆な流外の職ではありますが、すでに士人に奪われてしまいました。ただ赤県（注）の録事のみが、私どもにとつての清要の官なのです。いままた進士の方々が奪おうとされるのであれば、私ども（身分の低い）一色の者たちはどうすればよろしいのでしょうか」と。このことはついにとりやめとなった。

吏部では毎年、先に（人事条件等を記した）版牒を南院に掲げ、選人から提出される文書については、すべて規定の書式どおりにするよう求めた。一字でも誤りがあれば不合格とされ、なかには三十年もの間、官職を得られない者もいた。

楊国忠が吏部尚書になると、はじめて押例をつくって、任官年期の長い者から先に授官させた。書類に不備があっても受理を許し、斥けるようなことはなかった。任官・昇進できずにいた人々は、みなこれを褒め称えた。五品以上の官と清要官については、吏部では人事を行わず、名を中書門下（注）に送り、それぞれ位階をはかって時期をみながら皇帝が勅授を行った。経歴には長短があり、位階には高低がある。このため授任者は、或いは検校を（官職名の上に冠）称し、或いは兼・試・知・撰・内供奉の類を称することとなり、（官職の名目はひとつではなくなったのである。このころ【以下闕】）

（江川 式部）

本稿はJSPS 科研費18K01005・18H00700・16H05678の助成を受けたものである。

（二）『封氏聞見記』卷四・尊號

【原文】

秦漢以來、天子但稱皇帝、無別徽號。則天垂拱四年、得瑞石于洛水、文曰『聖母臨人、永昌帝業』。號其石爲寶圖。于是羣臣上尊號、請稱聖母神皇。後稍加『慈氏越古天冊金輪聖神』等號。中宗踐祚、號『應天神龍』。元宗即位、號『開元神武』、後稍加爲『開元天地大寶聖文神武應道』。肅宗號『光天文武』。代宗號『寶應元聖文武』。今上號『聖神文武』。則天以女主臨朝、苟順臣子一時之請、受尊崇之號、自後因爲故事。『允文允武、乃聖乃神』、皇王盛稱、莫或踰此。既以爲祖父之稱、又以爲子孫之號、雖顛之倒之、時有變易、曷曾離此。數代之後、將無所回避。貞元初、主上超然覺悟、乃下詔去其徽號、直稱皇帝、合于古矣。近歲百僚復請加尊號、上守謙沖、意不之許。昔光武皇帝詔羣臣上書不得言聖、孔子曰『若聖與仁、則吾豈敢』、其謙沖之意大矣哉！

【訓読】

秦漢以來、天子は但だ皇帝とのみ稱し、徽号を別つこと無し（一）。則天垂拱四年（六八八）、瑞石を洛水に得、文に曰く『聖母人に臨み、永えに帝業を昌んにす』と。其の石を号して宝図と爲す。是に于いて群臣尊号を上り、『聖母神皇』と称せんことを請う（二）。後に稍く『慈氏越古天冊金輪聖神』等の号を加う（三）。中宗踐祚し、『応天神龍』と号す（四）。元宗（玄宗）即位するや、『開元神武』と号し、後に稍く加えて『開元天地大宝聖文神武應道』と爲す（五）。肅宗は『光天文武』と号す（六）。代宗は『宝応元聖文武』と号す（七）。今上は『聖神文武』と号す（八）。則天は女主もて朝に臨み、苟くも臣子の一時の請に順い、尊崇の号を受くるを以て、自後因りて故事と爲す。『允に文允に武、乃ち聖乃ち神』、皇王の盛称、或いは此れに踰ゆるもの莫し。既に以爲えらく祖父の称にして、又た以爲えらく子孫の号、之を顛にし之を倒にし、時に變易有りと雖も、曷ぞ曾て此れを離さんや。数代の後、將に回避する所無からんとす。貞元の初め、主上超然として覺悟し、乃ち詔を下し其の徽号を去り、直だ皇帝と称し、古に合わしむ（九）。近歲、百僚復た尊号を加えんことを請うも、上謙沖を守り、意之を許さず（一〇）。昔光武皇帝詔するに群臣をして上書するに聖を言うを得ざらしむ（一一）。孔

子曰く「聖と仁との若きは、則ち吾れ豈に敢えてせんや」と(一一)、其の謙沖の意大なるかな！

【註釈】

(一) 秦漢以来、天子は但だ皇帝とのみ称し、徽号を別つこと無し。 秦の始皇帝が中国を統一すると、最高統治者の位を表す位号・

称号として、「三皇」「五帝」の例によって「皇帝」を採用した。このことについては、『冊府元龜』卷一六・帝王部・尊号門一に、

古者盛徳之君、若九皇・五帝、皆典籍之所述也。夏商而下、降号称王。秦并天下、始兼三五而建号、然後尊極之名著矣。歴代而下、遵而不易、時或因革、理非沿襲、踵事増華、其流弥盛。

とある。古代中国の君主の尊号制度については、戸崎哲彦氏の以下の一連の研究を参照。戸崎哲彦著「唐諸帝号攷(上)——皋陶から睿宗まで——」(『彦根論叢』二六四、一九九〇年)、同氏著「唐諸帝号攷(下)——殤帝から哀帝まで——」(『彦根論叢』二六六、一九九〇年)、同氏著「古代中国の君主号と『尊号』——『尊号』の起源と尊号制度の成立を中心に——」(『彦根論叢』二六九、一九九一年)、同氏著「唐代君主号制度に由来する『尊号』とその別称——唐から清、および日本における用語と用法——」(『彦根論叢』二七〇・二七一、一九九一年)、同氏著「唐代皇帝受册尊号儀の復元(上)——唐代皇帝即位儀礼の復元に向かつて——」(『彦根論叢』二七二、一九九一年)、同氏著「唐代皇帝受册尊号儀の復元(下)——唐代皇帝即位儀礼の復元に向かつて——」(『彦根論叢』二七三・二七四、一九九一年)、同氏著「唐代尊号制度の構造」(『彦根論叢』二七八、一九九二年)。

(二) 則天垂拱四年(六八八)、……『聖母神皇』と称せんことを請つ。 「則天」とは則天武后(在位六九〇～七〇五)のこと。「垂

拱」は睿宗期の年号、西暦六八五～六八九年。ただ、睿宗は光宅元年(六八四)に即位したものの、政治にはあずからず、皇太后であった則天武后が政治の実権を握っていた。

唐代になると、君主の存命中に君主の人徳や功績を表彰して君主一個人に与えられる名号の制度が創設された。戸崎氏によれば、その起源については、高宗と則天武后、さらに武后説でも光宅元年(六八四)・垂拱四年(六八八)・天授元年(六九〇)に分かれるというが、本文では、則天武后の垂拱四年説をとっている。則天武后が垂拱四年に尊号を受ける経緯について、『旧唐書』卷二四・礼儀志

四によると、

則天垂拱四年四月、雍州永安人唐同泰偽造瑞石于洛水、献之。其文曰「聖母臨人、永昌帝業」。於是号其石為「宝図」、賜百官宴樂、賜物有差。其年五月下制、欲親拜受「宝図」。先有事於南郊、告謝昊天上帝。於是則天加尊号為「聖母神皇」。大赦天下。改「宝図」為「天授聖図」、洛水為永昌。

とある。尊号のきっかけとなった「聖母臨人、永昌帝業」とある白石は、武后の甥の武承嗣が作らせたものである（『資治通鑑』卷二〇四・唐紀二〇・則天后垂拱四年五月条）。武后はこの石を宝図と名付け、洛水を拝して宝図を受けることとし、それに先立って南郊で昊天上帝に告謝した。宰相以下の官僚たちは、則天武后に「聖母神皇」の尊号をたてまつり（『文苑英華』卷五五四・崔融「代宰相上（賀）尊号表」、武后はそれを受け、「聖母神皇」となった。そして、この時には大赦が行われた。

この二年後の載初元年（六九〇）九月、則天武后は国号を周と改め、皇帝位に即く。この最初の尊号上進は、武后が政權を奪取する重要な段階の時に行われ、人心収攬を図るといふ政治的な意義を持っていたのである。垂拱四年の尊号制度については、戸崎氏前掲諸論文を参照。また、この宝図出現からの垂拱四年における武后については、金子修一氏著「則天武后の明堂の政治的役割」（唐代史研究会編『律令制－中国朝鮮の法と国家』汲古書院、一九八六年。のちに同氏著『古代中国と皇帝祭祀』汲古選書二六、汲古書院、二〇〇一年に解題所収）を参照。

（三）後によつや「慈氏越古天冊金輪聖神」等の号を加う。「慈氏」は弥勒菩薩のこと。「金輪」は、仏教で全世界を支配する聖王である「金輪王」にちなんでいる。即位後の則天武后は、長寿二年（六九三）九月の「金輪聖神皇帝」に続いて、たてつづけに「越古金輪聖神皇帝」、

「慈氏越古金輪聖神皇帝」、「天冊金輪大聖皇帝」という尊号を加えられていた。『資治通鑑』卷二〇五・唐紀二一・則天后長寿二年条から天冊万歳元年条までの記述を列挙すると以下の通りである。

（長寿二年（六九三）秋九月）魏王承嗣等五千人表请加尊号曰「金輪聖神皇帝」。乙未、太后御万象神宮、受尊号、赦天下。作金輪等七宝、每朝会、陳之殿庭。

（延載元年（六九四）五月、魏王承嗣等二万六千余人上尊号曰「越古金輪聖神皇帝」。甲午、御則天門樓受尊号、赦天下、改元。

(証聖元年(六九五)) 正月、辛巳朔、太后加号「慈氏越古金輪聖神皇帝」、赦天下、改元証聖。

春二月、：甲子、太后去「慈氏越古」之号。

(天冊万歳元年) 九月、甲寅、太后合祭天地於南郊、加号「天冊金輪大聖皇帝」、赦天下、改元。

制度が創設された則天武后の垂拱四年の受冊尊号の時から、冊尊号の儀礼が終わると、天下に大赦が発せられており、両者は最初からセットとなっていたが、この時期になると、臣下から尊号を受けて郊廟等の親祭を行い、改元して天下に大赦するというパターンが成立し、以後の唐代の皇帝に引き継がれていく。

(四) 中宗踐祚し、『**応天神龍**』と号す。 「中宗」は唐の第四代中宗李顕(在位六八三～六八四、七〇五～七一〇)。高宗の第七子で、

母は則天武后。高宗の死後即位したが、二カ月で則天武后に廃され、房州に流された。六九八年に再び皇太子となり、則天武后が退位すると、復位した。しかし、実権は韋后に握られ、のちに韋后と安樂公主親子によって毒殺された。中宗期の尊号については、『旧唐書』卷七・中宗本紀・神龍元年(七〇五)十一月条に、

十一月戊寅、加皇帝尊号曰「**応天**」、皇后尊号曰「**順天**」。壬午、皇帝・皇后親謁太廟、告受徽号之意、大赦天下、賜酺三日。

とあり、さらに同書・同卷・中宗本紀・神龍三年(七〇七)九月条に、

九月：庚子、上皇帝尊号曰「**応天神龍**」、皇后尊号曰「**順天翊聖**」、大赦天下、改元為景龍。兩京文武官、三品已上賜爵一級、四品

已下加階一階、外官賜勳一轉。

とある。神龍元年は、群臣から尊号をたてまつられたことのみを理由に皇帝親祭が行われた最初のケースであった。また、前後の状況から、冊尊号からの謁廟には韋后の政治的進出と深く関連していた。金子修一氏著「唐太宗―睿宗の郊廟親祭について―唐代における皇帝の郊廟親祭 その(一)」(唐代史研究会編『中国の都市と農村』汲古書院、一九九二年。のちに同氏著『中国古代皇帝祭祀の研究』(岩波書店、二〇〇六年)第七章に改題所収)を参照。

(五) 元宗(玄宗)即位するや、『**開元神武**』……**天地大宝聖文神武応道**と為す。 唐の第六代玄宗李隆基(在位七一二～七五六)は、

先天元年(七一二)八月に父睿宗から讓位されて帝位に就いたが、その翌年の先天二年(七一三)七月に当時まだ勢威のあった則天武

後の娘の太平公主とその一派を打倒して、ようやく全権を掌握した。玄宗期の最初の冊尊号は、玄宗が大平公主一派を打倒して間もないことである。『資治通鑑』卷二〇・唐紀二六・玄宗開元元年(七二三)条には、

(先天二年十一月) 辛巳、群臣上表請加尊号為開元神武皇帝。從之。戊子、受冊。

十二月、庚寅、赦天下、改元。

とある。戊子(二八日)に冊尊号の儀を執り行い、十二月庚寅(一日)に大赦、改元している。

玄宗が次に尊号を受けたのは、開元二十七年(七三九)である。『資治通鑑』卷二四・唐紀三〇・玄宗開元二十七年二月条には次のように記す。

群臣請加尊号曰聖文。二月、己巳、許之、因赦天下、免百姓今年田租。

それ以前に、『旧唐書』卷八・玄宗本紀上・開元十八年条によると、「是の歳、百僚及び華州父老累ねて表するに尊号を上りて内に「聖文」兩字を加え、並びに西嶽を封ぜんことを請うも、允さず」とあり、玄宗は「聖文」の二文字を加えるのを固辞していた。また、『冊府元龜』卷一六・帝王部・尊号門の開元二十七年二月条を見ると、開元二十七年になっても、群臣らが上表して前の尊号に「聖文」の二文字を加えることを求め、「凡そ八たび表し、然る後に之を許す」とあるように、ようやくこれを受け入れたのである。

玄宗は唐の皇帝の中でも特に道教を熱心に信仰したが、尊号にもそれが反映された。『資治通鑑』卷二五・唐紀三一・玄宗天寶元年(七四二)一月条及び二月条によると、

(春正月) 甲寅、陳王府參軍田同秀上言、「見玄元皇帝於丹鳳門之空中、告以『我藏靈符、在尹喜故宅。』」上遣使於故函谷關尹喜台旁求得之。…壬辰、群臣上表、以「函谷靈符、潜応年号。先天不違、請於尊号加「天寶」字。」、從之。

二月、辛卯、上享玄元皇帝於新廟。甲午、享太廟。丙申、合祀天地於南郊、大赦天下。…

とあり、田同秀という人物が「玄元皇帝が丹鳳門の空中に現われて、『老子が函谷関で『道德経』を書き与えたという』尹喜の故宅の傍らに靈符がある」と言われた」と上申したので採させたところ、靈符が見つかった。そこで、群臣は上表して、靈符の出現は改元した年号と合うので、従来の尊号「開元聖文神武皇帝」に新年号の「天寶」を加えるよう求めた。玄宗はこれを受け入れ、二月丁亥には「開

元大宝聖文神武皇帝」とした（『旧唐書』卷九・玄宗本紀下・天宝元年二月条）。その後、玄宗は玄元皇帝廟、太廟及び南郊で祭祀を行っている。この時の受冊尊号は靈符の出現によるものであった。

続いて、『冊府元龜』卷一六・帝王部・尊号門の天宝七載（七四八）五月条に、

（天宝）七載五月壬申、文武百僚以休祥累見，上表請加帝尊号曰「応道」。表再上，固違不從。甲戌，又上表曰……。帝手詔報曰、「禎祥者、所以合天人。鴻名者、所以彰德業。今封章繼至，誠請甚勤，敬鷹神休，允答人望，宜依來請」。己卯、有司告獻太清宮・太廟。庚辰、告昊天上帝・皇地祇・太社・太稷。壬午、公卿百辟奉冊上尊号曰「開元天宝聖文神武応道皇帝」。御興慶宮、受冊。

とあり、それまでの尊号に「応道」を加えた「開元天宝聖文神武応道皇帝」とした。受冊尊号にあたっては、事前に太清宮・太廟・南郊の告祭が有司の代行によって行われている。『旧唐書』卷九・玄宗本紀下・天宝七載（七四八）条によると、群臣からの請願は三月から始まっていることが分かる。

次は、翌年の天宝八載（七四九）閏六月である。同じく『冊府元龜』卷一六・帝王部・尊号門の天宝八載六月条によると、六月に太白山の山人李渾が「金星洞の中に『聖皇福寿』の符命が記された玉版石がある、とのお告げがあった」と伝え、御史中丞の王鉷が遊仙谷に行き、その玉版石を見つけて献上したため、王公・卿士・道俗は尊号を加えることを請願したが、玄宗は固辞した。しかし、丙辰、礼部尚書崔翹ら文武百官が再び上表したことにより、玄宗もこれを受け入れ、閏月丙寅に太清宮に親謁し、玄元皇帝に尊号を冊して「聖祖大道玄元皇帝」とし、高祖・太宗・高宗・中宗・睿宗の尊号に「大聖」の二文字を加えた。丁卯、群臣は玄宗に「開元天地大宝聖文神武応道皇帝」の尊号をたてまつり、玄宗は含元殿に出御して受冊した。

最後に、天宝十三載（七五四）二月の尊号である。『旧唐書』卷九・玄宗本紀下と『資治通鑑』卷二二七・唐紀三三によると、まず、前年の天宝十二載（七五三）十二月庚寅、憲部尚書張均らは玄宗に「開元天地大宝聖文神武孝德證道皇帝」の尊号をたてまつった。そして、十三載二月壬申あるいは癸酉に、太清宮で玄元皇帝に「大聖祖高上大道金闕玄元天皇帝」の尊号をたてまつり、その翌日、「漢家の諸帝、皆孝を諡とする故を以てなり」（『資治通鑑』卷二二七）との理由で、太廟で高祖・太宗・高宗・中宗・睿宗の諡号に孝の字を加えた。さらにその次の日に、群臣は「開元天地大宝聖文神武孝德證道皇帝」の尊号をたてまつり（『旧唐書』卷九・玄宗本紀下）、玄

宗は興慶宮で受諾し、天下に大赦した。

(六) 肅宗は『光天文武』と号す。

「肅宗」は第七代肅宗李亨（在位七五六～七六二）。安史の乱が起こると、玄宗は長安から四川に逃避したが、肅宗は馬嵬から玄宗と別行動をとり、靈武で即位した。『旧唐書』卷十・肅宗本紀・至德三載（七五八）条によると、三載正月甲戌朔。戊寅、上皇（玄宗のこと）御宣政殿、冊皇帝尊号曰「光天文武大聖孝感皇帝」。上以徽号中有「大聖」二字、上表固讓、不允。

とあるように、上皇である玄宗は、肅宗に尊号を加えようとしたが、肅宗はその尊号の中に「大聖」の二字があるために固辞していた。しかし、玄宗はそれを許さなかった。続いて、同書・同卷・肅宗本紀・乾元二年（七五九）春正月条には、

二年春正月己巳朔、上御含元殿、受尊号曰「乾元大聖光天文武孝感皇帝」。

とある。

(七) 代宗は『宝応元聖文武』と号す。

「代宗」は、第八代代宗李俶（のちに李豫と改名、在位七六二～七七九）。『旧唐書』卷十一・代宗本紀・宝応二年（七六三）秋七月条によると、

秋七月壬寅朔。戊申、群臣上尊号曰「宝応元聖文武孝皇帝」、御含元殿受冊。壬子、御宣政殿宣制、改元曰広徳、大赦天下。

とある。

(八) 今上は『聖神文武』と号す。

「今上」は、第九代徳宗李适（在位七七九～八〇五）をいう。『旧唐書』卷十二・徳宗本紀上・建中元年（七八〇）春正月条には、

建中元年春正月丁卯朔、御含元殿、改元建中、群臣上尊号曰「聖神文武皇帝」。己巳、上朝太清宮。庚午、謁太廟。辛未、有事於郊丘。是日還宮、御丹鳳門、大赦天下。

とある。

(九) 貞元の初め、主上超然として……直だ皇帝と称し、古に合わしむ。

「貞元」は徳宗期の年号で、西暦七八五～八〇五年。本文は「貞元初」とするが、実際には興元元年（七八四）正月のこと。徳宗は藩鎮対策の失敗と朱泚の乱の勃発により、長安から奉天県に避難し

た。その際に、玄宗が安史の乱の際に尊号を固辞した先例に倣い、「己を罪するの詔」において尊号について次のように述べている。

乃者公卿百僚用加虚美、以「聖神文武」之号、被蒙暗寡昧之躬、固辞不獲、俯遂群議。昨因内省、良所瞿然。自今已後、中外書奏不得言「聖神文武」之号。(『旧唐書』卷一二・德宗本紀上・興元元年春正月条)

(一〇) 近歲、百僚復た尊号を加え……上謙冲を守り、意之を許さず。

『冊府元龜』卷一六・帝王部・尊号門には、

貞元五年(七八九)十月、百僚累上表請復徽号、詔曰、三省來章、弥用兢惕、載崇大号、何以当之。前者示懷、蓋非冲讓、尚勞敦請、豈所宜然。卿等博達古今、列於朝右、思弘獻替、共致太和、豈以虚名、重予不德。再三循復、增惡于懷、想悉深衷、勿更陳請。六年(七九〇)九月戊午、百僚及道士僧等詣闕抗表、請上貞元聖神文武皇帝尊号、手詔不許。十月己亥、再詣闕抗表、猶不許。因謂侍臣曰、今年春夏亢旱、粟麦不登、朕精誠祈禱、獲降甘雨、既致豐穰、告謝郊廟。朕儻受徽号、是有為之、更勿煩請也。とあり、貞元五年十月、六年九月、同年十月と群臣から再三にわたって尊号復活の請願が起こっているが、いずれも固辞している。

(一一) 昔光武皇帝詔するに群臣をして上書するに聖を言つを得ざらしむ。

「光武」は後漢の初代光武帝劉秀(在位二五〜五七年)

のこと。『後漢書』卷一下・光武帝本紀に、

〔建武七年(三二)〕三月癸亥晦、日有食之、避正殿、寢兵、不聽事五日。詔曰、吾德薄致災、謫見日月、戰慄恐懼、夫何言哉。今方念愆、庶消厥咎。其令有司各修職任、奉遵法度、惠茲元元。百僚各上封事、無有所諱。其上書者、不得言聖。

とある。

(一二) 孔子曰く「聖と仁との若きは、則ち吾れ豈に敢えてせんや」と。

出典は、『論語』述而篇の、次の部分である。

子曰、若聖與仁、則吾豈敢、抑為之不厭、誨人不倦、則可謂云尔已矣。公西華曰、正唯弟子不能学也。

【現代語訳】

秦漢以来、天子はただ「皇帝」という君主の位を表す称号)だけを名乗り、それ以外の(存命中に君主の人徳・功績を表彰して与えられる)尊号はなかった。則天武后の垂拱四年に、瑞石が洛水で見つかり、その石に「聖母人に臨み、永えに帝業を昌^{さか}んにす」と書

いてあったので、その石を「宝図」と名付けた。そこで官僚たちは則天武后に尊号をたてまつり、「聖母神皇」と名乗るよう求めた。のちに、さらに『慈氏越古天冊金輪聖神皇帝』等の尊号が加わった。中宗が皇帝の位を継ぐと、『応天神龍皇帝』と名乗った。玄宗が即位すると、『開元神武皇帝』と名乗り、後に更には『開元天地大宝聖文武皇帝』と名乗った。肅宗は『光天文武皇帝』と名乗り、代宗は『宝応元聖文武皇帝』と名乗った。今上陛下（徳宗）は『聖神文武皇帝』と名乗った。則天武后は女性の君主として国を治めると、とりあえず臣下からの一時的な請願に従って、尊崇の称号を受けたため、その後、これをきっかけに（即位後や存命中に尊号をたてまつることが）先例となった。『文と武の徳がどちらも備わっており、聖と神の威徳を兼ね備えている』とは、皇帝に対する美称としてこれ以上のものはない。そのため、父祖への追尊である尊号として、さらにその子孫である存命中の皇帝の尊号として、これら（文や武、聖や神）をひっくり返したり、逆さまにしたりして、変化をつけることがあったとしても、これらをどうしてこれまで尊号から外すことがあっただろうか。則天武后から数代を経ても、尊号を止めようということとはなかった。貞元の初め、今上陛下は超然としてこのことを悟り、詔を下して自分の（聖神文武という）尊号を取り去り、ただ「皇帝」とだけ名乗ることにして、以前のやり方に戻させた。近年、官僚は尊号を復活する請願を行ったが、今上は謙虚さを堅持し、その願いを聞き入れなかった。昔、（後漢の）光武帝は詔を下し、臣下が皇帝に上書する際に、「聖」という字を使うのを許さなかった。孔子は「聖とか仁などというのは、私などとてものことだ」と述べていたが、なんと謙虚なことであろうか。

（高瀬 奈津子）

本研究は JSPS 科研費 17K03140 の助成をうけたものである。